派以外に懐徳堂の中井家にもそのような主張が見られるとして、「懐徳堂学派の中井家もまた、神主ではなく、仏式位牌を用いた『家礼』実践を主張していた」（二八二頁）と述べられている。しかし、著者が引いた中井家の喪祭礼実践手引書『喪祭私説』の、「必ずしも神主を作るに別にせず、唯だ世俗の所謂位牌を用うるのみ」という文章は、実は中井竹山自身の主張ではなく、俄かに神主を作り得ない人のために考えた三宅石庵の代替案を引用したものである。中井家は神主の使用を求めていた。念のために申し添えておく。

ともかく、本書は精査された史料に基づいて緻密に考察し、近世日本社会と儀礼に関わる先学の仕事をあたう限り掬い上げ、意欲的なおかつバランスの取れた論述を行なっている好著である。心よりお薦めする。

（国立台湾大学副教授）

清水光明著

『近世日本の政治改革と知識人——中井竹山と「草茅危言」』

（東京大学出版会・二〇二〇年）

横山　俊一郎

本書は、近世大坂の儒学者・中井竹山が時の老中・松平定信に提出した献策「草茅危言」に注目し、その寛政改革との関係、さらにその形成過程および受容過程を考察したものである。

具体的には、①「草茅危言」に収録された様々な政策構想は、いかなる経緯と背景のもとに構想されたのか、②在野の知識人である竹山が献策を通して民間から幕府の政治改革に関与し何程か政治を動かすことができたとしたならば、それは何故なのか、③「草茅危言」の政策構想は、寛政改革に際してどの程度採用され、どのくらい政治を実際に動かすに至ったのか、といった問題を、竹山が生きた同時代の政治・社会の諸状況に即して究明している。

竹山が学主をつとめた懐徳堂は、これまで「町人思想」を代弁する学問所のごとく叙述されてきた。著者はこの通説に対し、当の竹山は隠居するまで「竹山居士」という号を使い続けたように、仕官しない在野の読書人という自意識を有していた、と指摘する。また戦前以来の懐徳堂研究に共通する「草茅危言」

の扱いの少なさについては、「大阪文化の復興」という問題意識やそれを背景とした懐徳堂顕彰の傾向に規定されてきた、と主張する。

序章「近世中後期の政治・社会と知識人――「居士」・中井竹山と「草茅危言」の挑戦」では、研究史の整理と課題の設定を試みている。

まず研究史の整理では、著者は、(a)「民俗と秩序との対抗」という図式から「草茅危言」の宗教や習俗に関わる政策構想を考察した安丸良夫の研究、(b)「商人イデオロギー」の観点から「草茅危言」の内容の包括的な整理・把握を目指したテツオ・ナジタの研究、(c)十八世紀末の画期性（列強ロシアとの接触、大政委任論の登場等）に着目した日本政治史研究者による「草茅危言」研究、の三つの潮流にとりわけ注目する。そして、(a)および(b)が十八世紀の政治・社会のコンテクストのなかで「草茅危言」を位置づけようとしたこと、(c)が社会の諸状況や知識人の認識・言説・政策構想等をも包括的に含み込んだ政治史を模索していることを高く評価し、これらの長所を引き継ぐことを表明する。

次に課題の設定であるが、これは〈「草茅危言」と寛政改革の関係〉、〈「草茅危言」の形成過程〉、〈「草茅危言」の受容過程〉、という三項目に分けて言及している。

一つめの〈「草茅危言」と寛政改革の関係〉では、「草茅危言」の各巻の執筆年代・提出順序について基礎的な事実関係を確定する、という。「草茅危言」の各巻は、実は現行の順序とは異なるかたちで提出されており、その巻数も提出の途中で変更されていた。この重要な事実は、後述するように、著者が先行研究で未使用であった大阪大学附属図書館懐徳堂文庫蔵の竹山自筆本「草茅危言」を考察することにより初めて見出されることとなる。

二つめの〈「草茅危言」の形成過程〉では、先述した①および②の問いを検討する、という。その際、①については、女帝・後桜町天皇の治世、田沼時代の諸動向、天明の京都大火、光格天皇の治世、定信イメージや著述の社会への流布、ロシアの接近が社会にもたらした衝撃と動揺等のコンテクストに、②については、江戸を出立し上方（大坂城・二条城）に一年間在番した大番頭・大坂加番等の為政者たちが竹山に入門・交流するなかで形成された師弟関係と、それを基盤とした政治的連携の様相に着目する、という。

三つめの〈「草茅危言」の受容過程〉では、竹山によって執筆され定信に提出された「草茅危言」が、その後どのように受容されたのか、という問いを検討する、という。具体的には、長らく類似性が指摘されてきた「草茅危言」の朝廷改革構想と「近代天皇像」との関わりを検討するのであるが、今回はその前提作業として、竹山自筆本の「草茅危言」と各種刊本の「草茅危言」との主要な相違点、寛政改革終焉以降における竹山の「草茅危言」の取り扱い方、といった点に限定して考察を加え

る、という。

以上の課題設定を踏まえて叙述された本論の概要は、次の通りである。

第Ⅰ部「「草茅危言」を見直す――書誌学的考察と政治過程分析」では、「草茅危言」と寛政改革の関係についての基礎的な事実関係を確定することを目的としている（第一章、第二章、第三章）。

第一章「寛政改革との関係――各巻の執筆年代・提出順序および関連文書の検討から」では、竹山は天明八年十一月に「草茅危言」の巻之下を提出した後、定信の側近に密書を提出して大坂における玉造稲荷の砂持を中止に導き、さらに寛政二年冬に巻之一、同三年初頭に巻之二、同三年半ばに巻之三、同三年冬に巻之四を提出したことを明らかにしている。

第二章「為政者たちの接近――寛政元年の政治過程を中心に」では、幕府の要職への昇進コースを歩んできた大坂城代・堀田正順および老中・松平乗完が、定信の心証を良くするため、「草茅危言」を執筆していた竹山に接近した様子を実証している。

第三章「書誌学的考察――竹山自筆本の検討から」では、竹山は「草茅危言」の巻之下を提出した時点では、上・下二巻ないし上・中・下三巻の構想であったが、書き進めるうちに上・中（乾・坤二巻）・下の四巻に膨れ上がったため、寛政元年に上・中・下による構想それ自体を変えて全五巻としたことを明らかにしている。

第Ⅱ部「田沼時代からの射程――「草茅危言」の形成史と政治・社会(1)」では、田沼時代（一七五一―八七）の政治・社会を竹山はどのように認識し、その上でいかなる政策構想を考え、それがどのように「草茅危言」の諸構想につながっていったのかという点を長期的なスパンで検討している（第四章、第五章、第六章）。

第四章「女帝を詠む――後桜町天皇の十年間と政策構想の模索」では、竹山の後桜町天皇に対する認識およびその政策構想との関わりを考察し、「草茅危言」に記された朝廷改革構想は後桜町天皇の時代の経験や見聞に由来する可能性が高いことを指摘している。

第五章「大番頭・加番との交流――師弟関係の構築から政治的連携へ」では、竹山の大番頭や大坂加番との交流状況を考察し、将来老中になることを期待していた友人の遺児で父と同じく大番頭をつとめた堀田正穀との交流が、寛政改革への関与や「逸史」の幕府への献上につながっていくことを明らかにしている。

第六章「科挙と察挙――人材登用制度の模索と東アジア」では、竹山は中国宋代の朱熹や呂祖謙、前世代の知識人である室鳩巣や雨森芳洲の議論を引き継ぎつつ、一貫して漢代の察挙制度に依拠して人材登用の方法を模索していたことを明らかにしている。

第Ⅲ部「寛政改革期の諸相――「草茅危言」の形成史と政治・社会(2)」では、寛政改革期（一七八七―九三）の政治・社会――とりわけ、定信の統治や政策、対外関係――を竹山はどのように認識し、その上でいかなる政策構想を考えたのかという点を多面的な観点から検討している（第七章、第八章、第九章）。

第七章「「御新政」と「災後」――天明の京都大火と政策構想の模索」では、「草茅危言」の議論の前提には定信への期待に加えて光格天皇・朝廷の存在感の増大があり、さらに竹山は定信が大政委任論者であると知りながら自説を展開したことを実証している。

第八章「松平定信を語る――政治情報と献策」では、竹山の著作「天明盛事」の考察を通して、とくに白河藩世子時代から同藩主時代の定信をめぐる情報と挿話が、「草茅危言」の政策構想を構築するうえでの前提となったことを明らかにしている。

第九章「ロシアの出現とその波紋――対外認識と政策構想」では、竹山は「赤蝦夷」の語の由来や北方の諸勢力・諸集団の状況をほとんど知らなかったこと、またロシアの朝鮮侵攻の風聞に対する竹山と古賀精里の対話のズレが精里の思想形成やロシア研究の原点となったことを指摘している。

第Ⅳ部「政治改革の終焉と「草茅危言」の行方――「立言以治人」の思想」では、寛政改革の終焉後に、竹山は政治・社会について何を考え、どう行動したのか、そして「草茅危言」をどのように扱ったのかといった点を考察している（第十章、第十一章）。

第十章「寛政改革の終焉と竹山のその後――「立言以治人」の思想」では、定信の失脚後、竹山は幕府の政治とやや距離を取り、一方で諸藩への政策提言を通して日本全体の建て直しを図っていったこと、そうした中で信頼するごく少数の諸藩の関係者には「草茅危言」を内密に送付していたことを明らかにしている。

第十一章「「集大成」へ――竹山の晩年と「逸史」献上」では、竹山が「逸史」献上に至る経緯にはその息子・中井蕉園を介して大番頭・市橋長昭が関与していたこと、竹山は「史局」総裁の依頼は固辞したが、他方で幕府の歴史書編纂事業については政策提言していたことを指摘している。

以上の本論ののち、著者は終章「寛政改革から明治維新へ」において、成果・課題の総括と比較史上の論点の抽出を試みている。まず成果・課題の総括では、〈「草茅危言」の形成史と政治・社会〉、〈寛政改革期の政治史の図式〉、〈寛政改革における「草茅危言」の機能〉、という三項目に分けて言及している。

一つめの〈「草茅危言」の形成史と政治・社会〉では、①の問いに対し、上方に在番した大番頭のなかから竹山に師事し交流する者が現われ、その結果期せずして竹山は幕府の政治改革に関与することとなり、また同時代に朝儀の再興に意欲的な光格天皇が即位したことにより、竹山は「享保中興」以来の政治

改革の気運の高まりを看取し期待した、という。

二つめの〈寛政改革期の政治史の図式〉では、②の問いに対し、幕府の大番頭との持続的な交流が竹山の政治改革への関与を招来した点を強調するとともに、幕府の重職に就いた非定信派の為政者たちが揃って竹山に接近してきた事実に着目し、こうした広域的な連携関係こそが在野の知識人に過ぎない竹山が幕府の政治改革に関与し実際に政治を動かすことができた主要な要因である、という。

三つめの〈寛政改革における「草茅危言」の機能〉では、③の問いに対し、大政委任論の表明については、定信→竹山という順序での影響関係であって、竹山が定信に影響を与えたわけではないとしつつ、その一方で、寛政元年以降の民間社会への厳格な統制政策や、同三年以降の武家への文教政策（の一部）については、竹山の献策「草茅危言」とそれに関連する密書の提出を受けて実行された、という。

次に比較史上の論点の抽出であるが、これは〈政治体制と儒学〉、〈政治状況と献策〉、〈政治情報と為政者像〉、という三項目に分けて言及している。

一つめの〈政治体制と儒学〉では、十八世紀末以降の日本の政治体制の変容に関係したと思われる人材登用制度をめぐる議論が、中国における知識人たちの議論を踏まえていたことに着目し、こうした比較史的な事例が東アジアの近世・近代を考えるうえで重要なテーマとなりうることを提起する。

二つめの〈政治状況と献策〉では、近世日本は隣国の中国や朝鮮と異なり分権的な政治体制であったため、知識人たちは幕府・諸藩・朝廷といった多くのチャンネルから献策できたとし、また竹山の事例でみたように、彼らは「一治一乱」的な循環史観のもとに政治状況を認識し献策していた可能性を指摘する。

三つめの〈政治情報と為政者像〉では、竹山が生きた時代、政治情報の入手と活用は、為政者とその為政者に政策の実施を働きかける知識人たちとの駆け引きの重要な資源となっていたとし、また政治情報を前提とした対外認識については、風聞に対する議論が外国研究を進展させる要因になりえたことを重要視する。

以上のように本書の内容を紹介してきたが、本書の最大の功績は、先行研究における事実関係の誤りを正すことで、新たな歴史像を再構成した点にあるだろう。著者が述べているように、竹山の献策「草茅危言」は、その執筆年代・提出順序に関して誤解や不正確な解釈がなされ、寛政改革とはほとんど関係しないものとされてきた。しかし、著者が、竹山自筆本や当時の政治状況を踏まえて「草茅危言」を位置づけ直すことにより、それが確かに幕府の政治改革を推進する機能を有していたことが明らかとなった。他方、著者は思想史と政治史の双方の問題意識や考察手法を取り入れ、さらに竹山については士人としての自意識を有する教養人と捉え直し、彼を隣国の士大夫や両班と比較できる存在へと昇華させるなど、その視野の広さには目を

見張るものがある。

ただ気になるところも幾つか存在した。例えば序章において、「草茅危言」に内在する「民衆」の統制と武士の改革の両方の側面がどのような論理と経緯で結びついているのか究明する、と述べているが、本書を通読しても、その明確な答えを見出すことはできなかった。また本書は竹山の政策構想に注目しているが、その政策の中身は統制や文教、朝廷の分野に偏っている。政策といえば一般的には経済や外交などをイメージしやすいので、一口に政策構想というと若干の違和感があった。しかし、これらは本書の中心的な課題から離れたテーマであり、また些細な概念上の問題でもあるので、先述した本書の功績を損なうものでは決してない。

さて、ここからは本書の成果と私自身の研究を踏まえながら、一つの展望を述べさせていただきたい。実は私は、幕末期に懐徳堂が衰微した時、それと入れ替わるかたちで台頭した漢学塾・泊園書院について研究している。いわばポスト懐徳堂の大阪漢学に注目しているのであるが、そこでは不思議な現象を確認することができる。それは幕末維新期の泊園書院では、諸藩の教育職に就いた門人の多くが国事に奔走したり藩政の中枢を担ったりし、また明治期になると、豪農・豪商層の門人の多くが近代企業を創設したり経営したりするのである。したがって、大阪漢学の受容者は、著者の注目する十八世紀末以降の政治面の変容のみならず、その経済面の変容にも貢献した人々であったといえるだろう。

しかし、泊園書院については朱子学を標榜する懐徳堂と違って徂徠学を奉じていたので、大阪漢学の長期的なトレンドとしては「社会的機能の増大」に加えて「学派間の新旧交替」も確認することができる。いずれにしても、これらは著者と同じく学問所を取り巻く当時の社会状況や門人動向を考察することにより浮上してきた課題でもある。このことから考えても、やはり複数の学問分野を視野に入れた問題意識を持つことで見出されるものは少なくないのではないだろうか。最後に幾つか卑見を述べたが、この書評が著者にとって何がしかの参考となれば幸いである。

（関西大学非常勤講師）